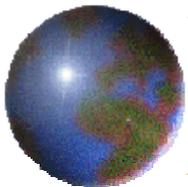


天津AWGの概要

2010年11月8日

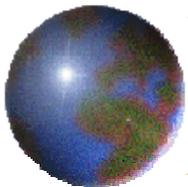
地球環境と大気汚染を考える全国市民会議（CASA）

専務理事 早川光俊（弁護士）



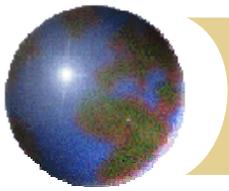
国際交渉の経緯

- 1992年 気候変動枠組条約に合意
- 1995年 COP1：ベルリンマンデート
- 1997年 COP3：京都議定書を採択
- 2001年 COP7：運用ルールの最終合意成立
- 2005年 京都議定書発効
COP11/CMP1：AWG-KP(先進国の2013年以降の削減目標に関する作業部会)
- 2007年 COP/CMP3：バリ行動計画(AWG-LCA：米国と途上国の排出削減・抑制努力について検討する作業部会)
- 2009年 COP15/CMP5：コペンハーゲン合意を「留意する」との決定
- 2010年4月 AWG-LCA9/AWG-KP11 (ボン)
- 6月 SB/AWG-LCA10/AWG-KP12(ボン)
- 8月 AWG-LCA11/AWG-KP13(ボン)
- 10月 AWG-LCA12/AWG-KP14(天津)
- 11月 COP16/CMP6 (メキシコ/カンクン)



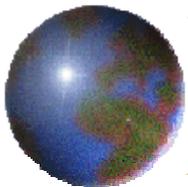
次期枠組み交渉の現状

- 2013年以降の先進国の削減目標を、第1、第2約束期間に隙間(ギャップ)を生じないように合意する必要。
- 議定書に参加していないアメリカの削減目標や中国などの主要な途上国の排出削減行動に合意する必要。
- COP15に119カ国の首脳が集まったが、合意に失敗。
- 今年3回の作業部会(AWG)が開催されたが、ほとんど進展なし。
- 今年のCOP16で包括的な法的文書の合意は難しく、2011年の南アでのCOP17で包括的な法的文書の合意を目指すというのが、現在の到達点。



コペンハーゲンの結果

- 「コペンハーゲン協定（Copenhagen Accord）」は合意できずに、「留意する（takes note）」COP決定として採択。交渉は継続。
- コペンハーゲン協定案の問題点と評価できる点
 - ピークアウトの期限も無く、長期目標については言及無し。また、先進国の中期目標は各国が自主的な削減目標。
 - 2 未満にすべきことが認識され、2013年以降の途上国への具体的な資金支援提案（2012年までに300億ドル、2020年までに1000億ドル）がなされた。
- COP15に向けて、アメリカや主要な途上国が削減行動を発表したことは、その目標数字の問題はあっても今後につながる成果。
- 119カ国の首脳が参加したことは、世界の重要な政治課題となったことを示している。

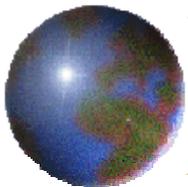


コペンハーゲン合意の賛同状況

- 世界の温室効果ガス排出量の86.76% を占める138カ国が賛同。
- 賛同していないのは、8カ国（世界の温室効果ガス排出量の2.09%）。

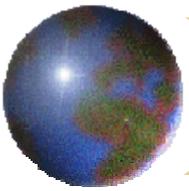
*コペンハーゲン合意への賛同国などの情報を知るには、以下のUSCANのページが便利。

<http://www.usclimatenetwork.org/policy/copenhagen-agreement-commitments>



天津会議の位置づけ

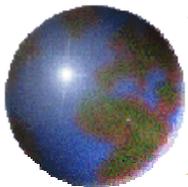
- カンクンでのCOP16前の最後の作業部会(AWG)。
- 中国で初めての交渉会議。
- カンクンでの包括的な合意が困難になるなかで、カンクンでの「バランスのとれた一連のCOP 決議 (a balanced set of decisions)」の採択可能な決定案をつくることが期待された。



AWG-LCA

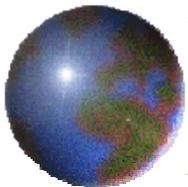
(長期的協力行動のための特別作業部会)

- AWG-LCAで始まった4つの起草グループ(ドラフティンググループ)がCOP決定案をまとめる作業。
 - ①共通のビジョン: a shared vision
 - ②適応: adaptation
 - ③緩和: mitigation
 - ④資金、技術、キャパシティビルディング: finance & technology & capacity building
- 会議はすべて非公開。
- ②、④と途上国における森林削減からの排出削減(REDD+)では一定の前進。③はほとんど成果無し。



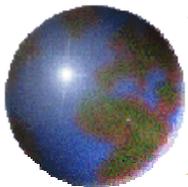
AWG-KP

- 4つのコンタクトグループで議論
 - ①先進国の排出削減量の規模(数値): Numbers
 - ②吸収源(LULUCF)、柔軟性メカニズム、手法論問題などその他の問題: Other issues
 - ③温室効果ガス削減対策による潜在的影響可能性:
Potential consequences
 - ④法的事項: Legal matters
- コンタクトグループは公開。
- 京都議定書の第2約束期間の目標は認めないとする日本、ロシア、カナダと、先進国がまず第2約束期間の野心的な削減目標(90年比40%以上)の議論を進めるべきとする途上国が対立。



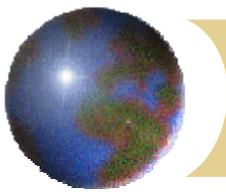
AWG-LCAの主要な論点

- 長期目標
- 先進国の削減目標/途上国の削減行動とその測定・報告・検証の方法(MRV)
- 途上国における森林削減からの排出削減(REDD+)
- 適応策
- 資金・技術移転などの支援策
- LCAの成果の法的形式



AWG-KPの主要な論点

- 先進国の削減目標
 - 基準年、約束期間
 - 各国の提出している目標の削減数値(QELROs)への変換
 - Giga ton gap: 90年比25~40%削減と先進国の提出している目標数値との乖離(7-10ギガトン)
- 京都メカニズム、新しいガス
- 森林などの吸収源のルール
 - 吸収量の算定ルール、特に森林管理の吸収量。
- 京都議定書改正の範囲



現在の各国の目標の水準

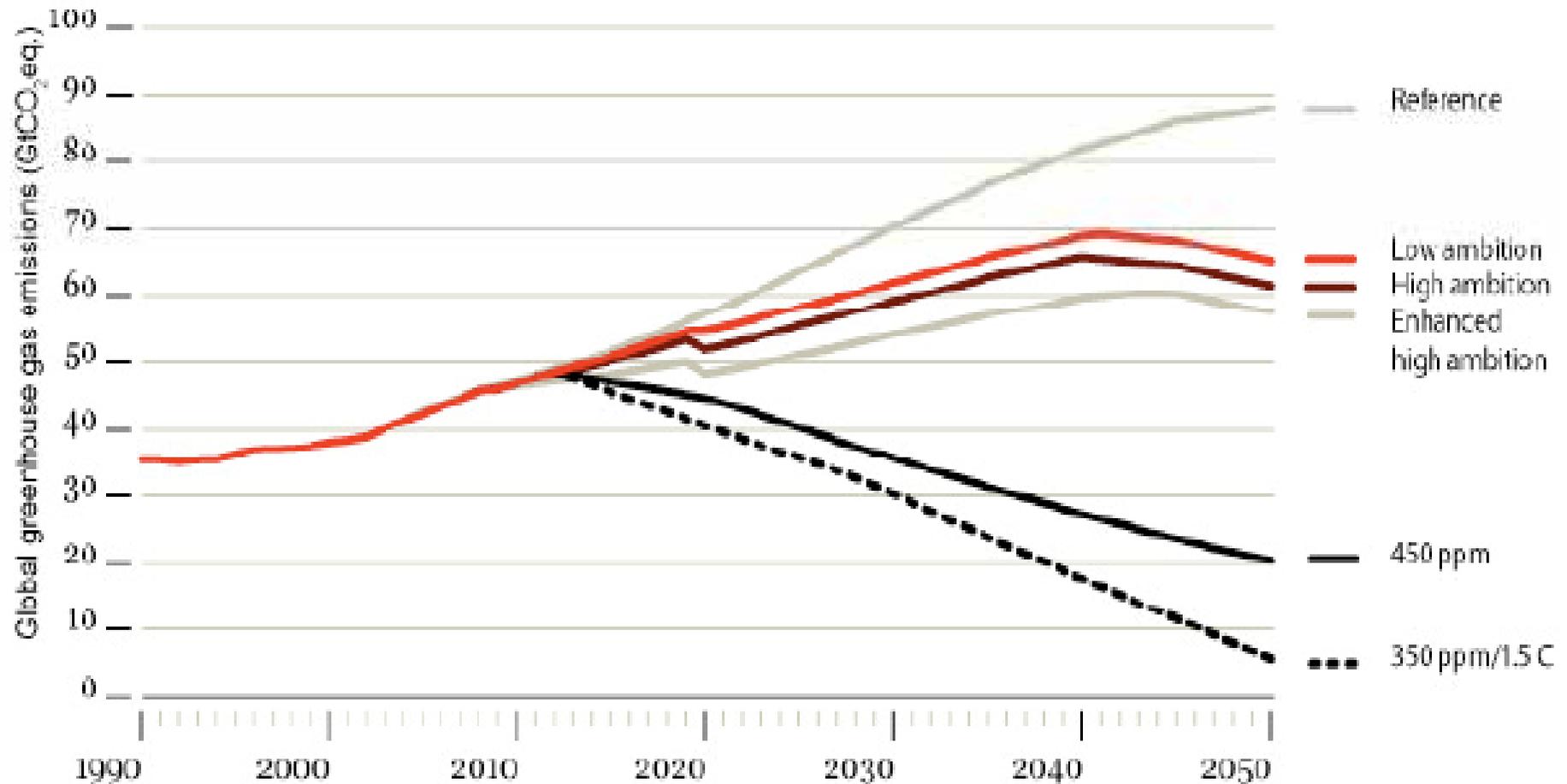
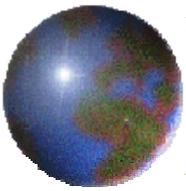
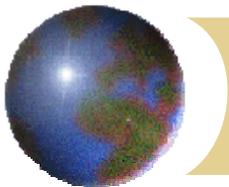


Figure 1. Global emissions under the reference scenario, proposals as of 15 December 2009, and necessary levels for 450 and 350 ppm Source: Höhne et al. 2009



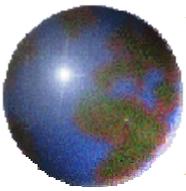
バランス？ *A balanced set of decisions*

- マーガレット・サンガルウェ条約AWG議長
 - バリ行動計画(BAP)の要素間のバランス。
- G-77/中国
 - 2つの交渉トラック(条約AWGと議定書AWG)のバランスを尊重すべき」。
 - 議定書AWGでの成果なしではバランスはとれない。
- アンブレラグループ(日本などの非EU先進国)
 - MRV(計測・報告・検証)および国際的な協議と分析はカンクンでのバランスのとれたパッケージに欠かさない要素。



2つのバランス

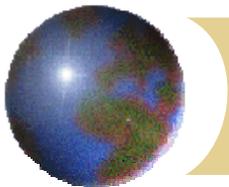
- AWG-LCAとAWG-KPとのバランス
 - 2つのAWGの「共通の関心 (common space)」に関する非公式協議 (韓国大使がmoderator)。
 - 先進国は2つのAWGを連結することを主張、途上国は拒否。
- それぞれのAWGの内容のバランス
 - 10月9日のAWG-LCA議長の報告。



法的形式について

- 法的形式のオプション
 - 1つの新議定書(日本、ロシアなど)
 - 京都議定書改正＋新たな議定書(途上国)
 - 京都議定書改正＋締約国会議(COP)の決定

 - 「つなぎ」としての京都議定書の延長？
- 日本政府は、「全ての国が参加する枠組み」で、「1つの法的枠組み」を強硬に主張。「京都議定書単純延長」には絶対反対？
- EU、ノルウェーなどは柔軟な交渉姿勢。



日本は何をすべきか？

- 地球温暖化対策基本法の策定
 - 日本の25%削減の具体的な政策が決まることは、混迷している2013年以降の削減目標と制度枠組みのついでの国際交渉を大きく前に進めることになる。
- 1つの議定書に拘らない柔軟な交渉姿勢
 - 重要なのは、アメリカの削減義務と主要な途上国の削減行動の確保。
 - 「全ての国が参加する枠組み」は2つの議定書でも担保可能。